都市農村交流型ワーキングホリデイの特徴分析
ー徳島県・上勝町ワーキングホリデイの事例からー*

Case Study of Working Holiday System between Urban and Rural Exchange
—In the Case of Kamikatsu-cho, Tokushima Pref.— *

田中紀子**　花岡史恵**　澤田俊明***　勝瀬真理子****　滑川達*****　山中英生*****
By Noriko TANAKA**　Fumie HANAOKA**　Toshiaki SAWADA***
Mariko KATSUSE****　Susumu NAMERIKAWA*****　Hideo YAMANAKA*****

１．　はじめに

近年の中山間地域においては､少子高齢化の進展、過疎化、後継者不足、木材価格の下落に代表される地域産業の衰退などの、従来からの「中山間地における諸課題」がより一層進展してきた。

これら中山間地特有の諸課題に加えて、地球温暖化等に代表される一連の環境問題、社会的な人口減の進展とこれに伴う経済的・社会的体力の弱体化、安い海外労働力に起因する国内の産業衰退、国や地方自治体における財政難などの、「国家的な諸課題」が、新たに中山間地域でも顕在化してきた。

すなわち､中山間地域においては、「中山間地における諸課題」と「国家的な諸課題」の“２重の課題”に直面しており、これらの諸課題の「悪い循環」が形成されている。

こうした中山間地域での「悪い循環」を打開し、「良い循環｣構築のための施策の一つとして､近年、都市農村交流における労働体験型のプログラムであるワーキングホリデイが注目されている。都市農村交流型ワーキングホリデイの先駆的事例として、宮崎県・西米良村での事例[1]、長野県飯田市の事例[2]等が良く知られているほか、ワーキングホリデイ実践者である井上による詳細な報告[3,4]が示されている。

徳島県上勝町は、人口約 2100 名の典型的な中山間地の農山村であり、過疎化・高齢化が進み人口減少に歯止めがかからない状況が進展している。この課題解決として、上勝町では住宅マスタープランが策定[5]され、定住促進のための「きっかけづくり」として、都市農村型ワーキングホリデイが試行的に実施された。

本研究は、都市農村型ワーキングホリデイの基礎的知見を得ることを目的として、まず、現在までのワーキングホリデイの類型整理を行う。そして、上勝町で実施されたワーキングホリデイの概要を示し、上勝町ワーキングホリデイの特徴分析を行う。

２．　ワーキングホリデイの類型整理

これまでの既情報をもとに、一部、考察を含めながら、ワーキングホリデイの類型整理を行う。

(1)　類型の基礎整理

ここでは、ワーキングホリデイを「労働を介した交流活動」として定義する。このとき、ワーキングホリデイは､国際交流型と国内交流型に区分できる。

国際交流型のワーキングホリデイは、２国間協定のもと、1980 年代にスタートした制度で、就労ビザなしでも一定期間働きながら海外に滞在できる国際交流の特別制度である。現在、若者を中心に年間約１万人が利用している。

国内交流型のワーキングホリデイは、これまで都市農村交流型のワーキングホリデイが先駆的に実施されてきた。以下、国内交流型ワーキングホリデイの類型の基礎整理を行う。

都市間交流(地域間交流)の視点から区分すれば、「都市－都市交流型」「都市－地方交流型」「地方－地方交流型」の成立が想定される。

また、労働対象の視点から区分すれば、農林業・

---

*　ｷｰﾜｰｽﾞ：市民参加、地域計画、ワーキングホリデイ
**　正員、(有）環境とまちづくり（〒771-4501 徳島県勝浦郡上勝町福原川北 30 TEL08854-4-6290）
***　正員、博（工)、(有）環境とまちづくり（〒771-4501 徳島県勝浦郡上勝町福原川北 30 TEL08854-4-6290）
****　淡路景観園芸学校（〒656-1726 兵庫県津名郡北淡町野島常盤 954-2、TEL0799-82-3131）
*****　正員、工博、徳島大学工学部（〒770-8506 徳島市南常三島町 2-1、TEL088-656-7350）

漁業・商業などの「産業体験型」、及び、「地域環境整備」「社会資本整備型」に区分できる。労働強度の視点からは、ある程度、労働強度が比較的少なく観光的要素も内在する「体験型」、労働そのものを提供し労働強度が高い「労働型」に区分できる。

参加者の労働に対する報酬の視点から区分すれば、報酬が全くない「無報酬型」、ある程度の報酬が存在する「半報酬型」、労働に対する報酬がかなり存在する「報酬型」に区分できる。また、報酬の形態の視点からは、金銭により支払われる「金銭報酬型」、食事や宿泊などにより支払われる「金銭外報酬型」に区分できる。

このほか、以上の整理に良く似通っているが、近年ボランティアとアルバイトを会わせた「ボラバイト（略称ボラバイ）[6]」の活動が全国的に拡がりつつあり、これらの参加者を「ボラバイター」と称している。

以上のワーキングホリデイ類型の基礎整理を表１に示す。

表 1　ワーキングホリデイの類型の基礎整理

区分	区分内容
国際交流型	２国間協定：就労ビザなしでも一定期間働きながら海外に滞在できる
国内交流型	１．都市間交流の視点区分 都市－都市交流型、都市－地方交流型（都市農村交流型、都市漁村交流型、ほか）、地方－地方交流型
	２．労働対象の視点区分 産業体験型、環境整備型、社会資本整備型
	３．労働強度の視点区分 体験型、労働型
	４．最終受け入れ者の視点区分 個人、地域、行政
	5-1 報酬の視点区分 無報酬型、半報酬型、報酬型 5-2 報酬の形体区分 金銭報酬型、金銭外報酬型
	６．主催者の区分 個人・グループ、地域住民、行政
その他	ボラバイト

(2)　都市農村交流型ワーキングホリデイの事例調査

都市農村交流型のワーキングホリデイは、国内交流型のうち、都市－地方交流型のワーキングホリデイに区分できる。一般に、都市農村交流型のワーキングホリデイは、都市住民が豊かな自然や美しい景観を持つ農村地域へおもむき、普段経験したことのない農業体験や林業体験を経験する。都市農村交流型のワーキングホリデイの特徴は、過疎化、高齢化により労働力が低下した地域で「働く」ということであり、お試し体験ではない事例が多い。

都市農村交流型ワーキングホリデイの事例を、産業体験型（主として農林業）、環境整備型に整理して表２に示す。農林業体験型ワーキングホリデイでは実施期間は随時とされる場合がほとんどである。実施期間は受け入れ農家の応援要望の有無に寄るため、受け入れ農家が地域に多ければ受け入れ可能期間もバリエーションに富み、恒常的に受け入れが可能となる。

作業報酬の視点から見ると、宮崎県西米良村のみが賃金制を採用しており、他の地域は作業報酬を与えていない。ただし、西米良村の場合は参加者の滞在費、食費が自己負担となっており、賃金は参加者がそこで生活する費用となる。他の実施事例として、熊本県小国町ではワーキングホリデイ参加者に対して地域通貨である「おぐにポイント」を付与するシステムを導入している。

環境整備型の特徴としては活動のリーダーが存在することである。一方、農林業体験型では受け入れ農家が指導者の役割も果たす。環境整備型では作業対象が公の場所であるため、地域ぐるみの協力体制が必要となる。それゆえ地域内での様々な交流が可能となる。

表 2　都市農村交流型ワーキングホリデイ事例一覧

地区	開始時期	区分	参加費	金銭報酬	滞在日数
宮崎県 西米良村[7]	1997	A	往復交通費、滞在費、食費	あり	3 日～ 1 週間
長野県 飯田市[8]	1998	A	往復交通費	なし	3 泊 4 日
石川県 穴水町[9]	2001	A	往復交通費、宿泊＋食費=5,000 円	なし	6 泊 7 日
岩手県 遠野市[10]	2002	A	往復交通費	なし	3 日～ 1 週間
徳島県 上勝町[11]	2005	A B	往復交通費	なし	2 泊 3 日
福岡県 黒木市[12]	1998	A B	往復交通費、宿泊＋食費=20,000 円	なし	3 日～ 1 週間
石川県[13]	2002	B	往復交通費	なし	日帰り

区分　A：産業体験型（主として農作業）
B：環境整備型

３．　上勝ワーキングホリデイの概要

(1)　背景と経過

徳島県上勝町は、地域の生き残りを掛け、住宅マスタープラン推進事業のひとつとして小集落ごとの地域懇談会（以下「懇談会」と略記）を実施している。そのうち、中津賀地区では、地域の活性化、持続可能な地域づくりを目的として2003年11月より2005年6月現在まで14回の懇談会が開催されている。懇談会参加者は、高齢者を中心とした地域住民10～20名から構成されている。上勝町ワーキングホリデイ（以下「上勝WH」と略記）は中津賀地区懇談会から生まれた。

表 3　中津賀地区懇談会の概要

年度	開催回数（主な活動）
2003年	4回開催（プログラムづくり）
2004年	8回開催（第1回上勝WHの開催、ホタル鑑賞会）
2005年	2回開催（第2回上勝WHの開催、ホタル鑑賞会）

表 4　上勝WH（ワーキングホリデイ）導入の経過

名称（人数）	開催日時	テーマ
第7回 懇談会（12）	2004年 11月11日	・長野県飯田市WH事例紹介①
第9回 懇談会（14）	12月15日	・長野県飯田市WH事例紹介② ・上勝WH実施決定
第10回 懇談会（18）	2005年 2月17日	・WH作業項目確認、受け入れ先調整
第11回 懇談会（25）	2月28日	・第1次上勝WHの最終確認
第1次 上勝WH	3月4日～ 3月6日	・第1次上勝WHの実施
第12回 懇談会（9）	3月29日	・第1次上勝WHの振り返り ・第2次上勝WHの最終確認
第2次 上勝WH	4月8日～ 3月10日	・第1次上勝WHの実施
第13回 懇談会（14）	4月26日	・第2次上勝WHの振り返り

(2)　ワーキングホリデイの概要

上勝WHは、「参加者は、交通費自己負担で上勝町農家の農作業・里山作業のお手伝いをし、受け入れ農家は、これら作業方法を教え、宿泊と食事を提供する」仕組みで、2泊3日の日程で2回開催された。（注:一般には、3泊4日以上で実施されている）

募集人数は、各回20名であったが各回とも募集人数を上回る応募があった。作業内容は、「地域環境整備」と「農作業」であった。参加者は、第1次WHでは、春休み期間であったため学生の参加者が多く、第2次WHでは、熟年世代の夫婦の参加も数組見られた。また、上勝WHは、参加者の交通費自弁で労働に対する報酬は無いが、宿泊・食事等は受入農家が提供する形になっており金銭の供与は発生していない。

表 5　上勝WH（ワーキングホリデイ）概要

項目	第1次WH	第2次WH
期間	2005年 3月4日～3月6日	2005年 4月8日～4月10日
募集人数	20名	20名
応募人数	40名	39名
参加人数	32名	29名
作業内容	【地域環境整備】伐木・伐木の運搬焼却・間伐材小屋づくり 【農作業】鶏出荷・しいたけ菌詰め・薪割り・野焼き・キウィ剪定・タラメの伏せ込み、他	【地域環境整備】伐木・伐木の運搬焼却・石積み・遊歩道橋設置 【農作業】ひよこの世話・草むしり・彩出荷・こんにゃく作り・田起こし・あめご出荷、他
受入農家	中津賀地区：6戸 その他地区：4戸	中津賀地区：6戸 その他地区：7戸
参加費	往復交通費（参加者自己負担）	
作業報酬	金銭報酬：なし　金銭外報酬：食事・宿泊	
宿泊	受入農家	
保険	ボランティア保険（受入農家負担）	
PR広報	タウン誌、新聞（地方・全国）、テレビ、ラジオ、大学、メーリングリスト、団体HP等	
体制	主催：中津賀くるま座会議（地域住民） 運営協力：上勝町まちづくり推進課 上勝自然体験学習研究会	

表 6　上勝町WHスケジュール　（２泊３日）

日付	内容
1日目	1.集合・受付 2.ガイダンス（農家･作業ﾒﾆｭｰ紹介・作業ドラフト選択・宿泊場所・ｸﾞﾙｰﾌﾟ顔合せ等） 3.現地へ移動、作業スタート（15時～） 4.農家で宿泊
2日目	1.作業（終日） 2.交流会（参加者紹介など） 3.農家で宿泊
3日目	1.作業（午前中） 2.振り返り交流会（アンケート実施） 3.解散
	4.オプション体験（ゴミ34分別見学・ヤッホー体験・棚田見学等）

表 7　参加者年代別一覧

年代	第1次		第2次	
	男（人）	女（人）	男（人）	女（人）
10代	0	4	2	1
20代	12	13	7	5
30代	0	3	3	1
40代	0	0	0	1
50代	0	0	3	2
60代	0	0	3	1
計	12	20	18	11

４．　考察

(1)　上勝ワーキングホリデイの特徴

上勝WHは、地域住民組織（中津賀くるま座会議）により都市農村交流型WHとして開催された。WH労働は、産業体験（主として農作業・里山作業）と地域環境整備が対象となった。

上勝WHでは、地域住民組織により、地域の環境整備がワーキングホリデイ手法を用いて実施された。地域環境整備は、中津賀集落を流れる藤川谷川の清掃・周辺の樹木伐採・藤川谷川の渕周辺の遊歩道整備を対象にしたもので、地域社会資本整備を地域住民が自主的に行ったものと言え、注目に値する。

表 8　上勝WHの類型（表１を元に作成）

類型の視点区分	類型の内容
国内、国外区分	国内交流型
１．都市間交流の視点区分	都市－地方交流型（都市農村交流型）
２．労働対象の視点区分	産業体験型（農作業・里山作業）、環境整備型
３．労働強度の視点区分	労働型
４．受け入れ者の視点区分	個人、地域
5-1 報酬の視点区分	半報酬型
5-2 報酬の形体区分	金銭外報酬型（食事・宿泊）
６．主催者の区分	地域組織（中津賀くるま座会議）

(2)　ワーキングホリデイの効果

ワーキングホリデイの効果としては、直接効果・間接効果が考えられる。

直接効果としては、労働経済価値・直接経済価値・生きがい価値があげられる。間接効果としては、マスコミ等による上勝地域の広告ＰＲ・関係交通機関の利用などがあげられる。表９に第１次及び第２次WHの試算を示す。

第２次WH終了時のアンケート調査で、「生きがい価値」把握のために、ワーキングホリデイ参加のための支払い意志額の調査をおこなった。受け入れ農家側では 5000 円が 39%、続いて 3000 円、2000 円という回答であった。また、受け入れ農家の 89%は、費用負担しても良いという回答であった。参加者側では 5000 円との回答が 52%あり、1 万円円以上の回答が 7%あった。また、すべての参加者が費用を負担してもよいとの回答であった。この結果は、ワーキングホリデイの持つ「強い生きがい価値」が存在していることを示唆している。

表 9　上勝 WH の効果の試算　（第１次・第２次計）

効果	内容
直接効果 (180 万円)	【労働価値】：61 人×2 日の労働資源が投入 ・　122 人日×5000 円=610,000 円（60 万） 【直接経済価値】：122 人日の生活活動費 ・　生活費 4000 円、交流会 2000 円、お土産 1000 円、風呂 500 円、その他 500 円 ・　122 人日×8000 円=976,000 円（95 万） 【生きがい価値】：例えば支払い意志額 ・参加者 61 人＋受入 23 戸、各 3000 円=252,000（25 万）
間接効果 (100 万円)	参加者・マスコミ報道による上勝 PR 費、交通費、他

５．　おわりに

今回上勝町で実施された都市農村交流型のワーキングホリデイは、参加者と受け入れ者の間で、金銭授与が発生しない。そのため、ワーキングホリデイ関与者間での強い交流構築が達成されたものと推察される。その一方で、金銭授与が発生しないため、ワーキングホリデイの運営事務局は、100%無償ボランティアでの参加となった。小規模な過疎地での持続的な都市農村交流型ワーキングホリデイの実施には、運営面での自立的組織の確立が不可欠となり、今後の大きな課題と思われる。

参考文献

[1] 宮崎県西米良村ホームページ http://www.nishimera.jp/nishimera/karicobo.html
[2] 長野県飯田市ホームページ http://www.city.iida.nagano.jp/waki/
[3] 井上弘司：都市住民と農村住民の新たな共同体「ワーキングホリデイ」、農村文化運動 164、2002 年 4 月号、p.p.17-24
[4] 井上弘司：地域の環境・文化を学びあい高めあうツーリズムは人づくり、農村文化運動 173、2004 年 7 月号、p.p.37-46
[5] 澤田俊明、花本靖、山中英生、滑川達、花岡史恵、福田景子：過疎地域の戦略的住宅マスタープラン施策の報告－徳島県上勝町の事例より－、第 28 回土木計画学研究（秋大会）、ＣＤ版４項、2003 年 11 月
[6] ボラバイト　http://www.volubeit.com/
[7] １と同じ
[8] ２と同じ
[9] 石川県穴水町ホームページ http://www.shikino-oka.jp/taikensc/index.html
[10] 岩手県遠野市「風の丘」ホームページ http://www.echna.ne.jp/~furusato/
[11] 徳島県上勝町ホームページ http://www.kamikatsu.jp/working/top/top.htm
[12] 山村塾ホームページ http://www.h3.dion.ne.jp/~sannsonn/
[13] 地域活性化センター：「都市と農山魚村の共生・対流 2004、事例５」http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/info/online-book/kyouseibook2004/special_5/